未来の県建設業界を担う鶴崎工業高建築科３年生ら＝大分市

鶴崎工業高建築科3年

企業就職 全員が専門職

県独自のキャリア教育 結実

【大分】大分市の鶴崎工業高建築科3年（1クラス40人）は今春、一般企業に入社する25人が全員、建設専門職に就く。これまでは他業種に流れるケースもあったが、2016年に県内の産学官で結成した「おおいた建設人材共育ネットワーク」のキャリア教育が実を結んだ。高齢化と人材不足に悩む県建設業界に明るい兆しを与えている。

15年国勢調査によると、県内の建設業就業者は20年間で37％減少し4万6376人。年代別で29歳以下は4863人と63％減った。産学官の29団体で構成するネットワークはこの状況に歯止めをかけようと、人材の確保、育成に取り組んでいる。鶴崎工を含め、建設を学ぶ県内6高校と連携し、建設現場の体験学習会や出前授業などをしている。

同校は外部講師による授業、住宅見学会、卒業生から体験談を聞く会など独自のキャリア教育を展開し、社会との接点を増やした。

県建設業協会の支援によるインターンシップは2年時に実施。3日間、17社に分かれて現場を体験した。このうち14社に入社が決まった。

同協会の下郡政治専務理事(62)は「若い人材が県内の建設会社にも目を向けるようになり、大変喜ばしい」と歓迎する。ネットワーク会長を務める佐藤啓治校長(58)は「現場体験を通し、設計、積算、塗装、現場監督など各自がやりたいことが明確になった。進路選択のミスマッチがなくなった」と話す。

建設専門職以外は大学などへの進学が13人、公務員は2人。

同市の建設会社に内定した沢井捺未（なな）さん(18)は「現場見学やインターンシップで建設業の魅力に気付いた。地質調査の分野で役に立ちたい」。大分大理工学部に進む芦刈翼さん(18)は「将来は大分の都市計画に関わりたい」と目を輝かせた。

（坂本陽子）